

当院におけるがん患者に対する妊孕性温存の現状

門上大祐 北山利江 重田護 太田志代 勝加奈子 高矢千夏 中岡義晴

IVF なんばクリニック

森本義晴

HORAC グランフロント大阪クリニック

当院で取り組んでいる妊孕性温存の現状について報告する。対象は2013年4月～2017年11月の期間で、妊孕性温存目的に原疾患主治医から紹介となった担がん患者202名(女性104名、男性98名)である。全ての患者にカウンセリングを行い、希望した症例に対して妊孕性温存を試みた。これらの症例の治療内容について後方視的に検討を行った。女性症例は乳がん74例、血液疾患24例、その他10例であり、平均年齢は34.7歳(17～48歳)であった。87例で妊孕性温存を希望されたが、うち7例が化学療法後無月経の状態であり治療を断念した。80例112周期で卵巣刺激を行い、1人当たりの平均凍結卵子数は6.5個(0-30個)、平均凍結胚数は3.1個(0-12個)であった。胚移植は6名に対し合計9回行った。1名で妊娠を認めたが、妊娠9週で流産の診断に至っている。男性症例は血液疾患51例、精巣・前立腺疾患15例、骨軟部腫瘍14例、消化器疾患8例、その他10例であり、平均年齢は32.5歳(14～64歳)であった。全ての症例で妊孕性温存を希望され採精を行った結果、10例(化学療法後8例、ホルモン治療後1例、無治療1例)で無精子症を認め、採精できなかった2例を除いた86例で精子凍結を完了した。精巣疾患の症例では精子所見不良の傾向が見られた。凍結精子を使用して体外受精を行ったのは7例であり、19回胚移植を行い、9例で妊娠成立を確認した。現在までに5例が分娩に至っており、1名が妊娠継続中である。このように原疾患治療を遅延することなく、妊孕性温存を行うことが可能であった一方で、受診時にはすでに妊孕性を喪失している症例も見受けられた。妊孕性温存には他科や他院とのスムーズな連携が不可欠であり、今後より一層成熟したネットワークの構築が必要であると思われた。